

## 子どもアートイベントを事例とした大学生の実践力向上について

### Improve Practical Skills of Students : A Case Study of Art Events for Children

寛 有子

#### 要 約

2019年と2020年に企画した子どもを対象としたアート系の実践活動を取り上げ、幼稚園教諭・保育士を目指す学生達の実践力向上に関する実態調査を行った。企画の関わり方は①学生主導型②アーティスト・講師や施設との共同企画型③教員主導型④ボランティア参加型があり、そのうち①～③に該当する7つの企画を報告した。また、参加した学生達の質問用紙調査は、選択項目の数値と自由記述による評価を行なった。選択項目では、学生間の連携、参加者の満足度に添うことの2点について多くの学生が能力が向上したと実感していた。全体説明（導入）及び、実施施設やその職員との交渉に係る事項については実際に担当した学生とそうでない学生との差が大きかった。自由記述では、保護者連携の機会の多さが実践力向上につながったこと、子供達の造形活動を支援する喜びが感じられたこと、図画工作に対する苦手意識が解消されたことなどが記入された。

キーワード：大学生 実践力 DiCoRes 子どもアートイベント

#### 1-1. 目 的

本研究は、2019年度と2020年度に企画した7つの子供達を対象としたアート系の実践活動を取り上げ、主に幼稚園教諭・保育士を目指す学生達の実践力向上に関する実態調査を行うものである。

筆者の勤務大学では、2011年度より「継続的かつ体系的な教育実践プログラム」<sup>1</sup>として、DiCoRes（ディコレス）プログラムの名称で学生主体の実践活動型カリキュラムを実施している。高等教育で培われる理論的思考や専門的な知識の習得と並行して、実際に子供に関わる実践活動を行い、双方を行き来するサイクルにおいて、相互的な学びが深まっていくように指導している。このプログラムについては、名倉・緩利（2014）<sup>2</sup>や池谷（2015）<sup>3</sup>において、大学生の実践力向上について一定の成果が示されている。

アートイベントに大学生が関わる活動については、美術教育の分野で実践研究の報告例がある。造形ワークショップの子育て支援に対して有する意義や機能を明らかにした大泉（2020）<sup>4</sup>、子ども向け造形ワークショップ実施における学生の育ちについて「環境設定」「子どもたちへの対応」「仲間との協力」「見通しを立てること」の重要性を説いた香月（2016）<sup>5</sup>などがある。

今回、造形や図画工作に関連するアート系の子どもイベントに絞り、その成果を、学生が実践力向上をどう捉えているかという観点で報告する。ここでの実践力とは、保育及び造形の専門的な実践力、学生の企画力、コミュニケーションや社会性に関わる能力と定義する。それにより、ゼミナール系の授業内で行っている実践活動が、学生の実践力向上の実感に与える影響について検討する。

## 1-2. 子ども対象のアートイベントとは

子どもを対象とするアートイベントには様々な形態がある。主に知られているのは、美術館などが主催する教育普及プログラムである。美術館の来場者数への市民の関心の高まりにおいて、美術鑑賞を次世代にとって身近なものにするという目的で行われる。本論で取り扱うイベントでも、一件がこのような趣旨で行われている。その他、青少年育成施設や科学館・博物館などの各施設で行われる場合もあり、例えば自然と触れ合うことを目的としたネイチャークラフトなど、キャンプ活動などの1日を通じた活動の一部として行われる場合もある。手を動かし何かを作ることを通して交流する、子どもへのアプローチとして様々な機会に活用されている。

学生の関わる企画の形としては、以下に述べるような形態が想定できる。

- ①学生主導型……学生が自らの目的や興味関心に沿ってテーマや参加条件を設定して企画する。その場合も、実施場所の設定や施設とのやりとりにおいては、一部は教員が関わる場合が多い。
- ②アーティスト・講師や施設との共同企画型……実施施設から教員への依頼で始まる企画が多い。展覧会やキャンプなどの内容に沿った企画を学生が立てて実施する。
- ③教員主導型……教員が企画の内容や日程・参加条件を設定して行うもので、学生達の意識や関係性が出来上がる前にクラス開き直後の活動などで行う場合がある。教員の企画に参加し、実践を経て、学生達が主体的な企画を作れるようになっていくことを目指す。
- ④ボランティア参加型……実施内容が決定している企画に学生がボランティアとして参加することで企画立案から準備、片付けや反省会、省察までの一連の流れを理解する。例年、それぞれの学生が一度はこのようなボランティアに関わった上で、学生主体型企画を立ち上げるように指導している。

なお、企画の形においては、企画立案の当初に明確な場合もあるが、流動的な場合もあり、学生主体の企画を検討してもうまく企画が立ち上がらなかった場合に教員主導型に切り替えたケースとして①→③となった場合、当初ボランティア参加型での企画が検討されていたが、実施施設の職員との打ち合わせで学生の卒業研究の内容などと合致していることがわかった段階で企画を学生に任せてもらったケースとして④→①の場合などもあった。なお、本論第2章の報告では④については紙面の関係上省略

する。イベント当日の流れにおいては、

- ①講座型……定員を一定数に設け、一斉に材料用具の配布や作り方の説明などを行うもの
- ②出入り自由（回遊）型……入場に参加費などを掛け、様々な小イベントに自由に参加できるような形態、または展覧会などのイベントに付随して行い、そこにいる人々に参加を募るもの

の2パターンがある。企画を準備する方としては①は予め年齢や人数を元に材料や下準備がしやすいが集客のための広報を独自に打つ必要がある。②の場合は付属するイベントの来場者の数を想定しつつ、その入場者の何割かを見込む事ができる点で集客が容易であるが、材料用具は多めに用意し、活動内容の説明を参加者が集まる都度に行う必要がある。

当日の流れにおいては、後述する企画の内(1)および(4)(7)において①の講座型であった。(3)は②の出入り自由型であった。美術館で行なった(2)では、予約制の参加者のうちに材料用具・時間ともに余裕があったために、当日の展覧会来場者にも声をかけて自由参加とし、①と②のハイブリッド形態で行なった。このように企画の形や当日の流れも様々な形態があり、上記のように条件次第では、臨機応変に実践する場合もある。

### 1-3. 関連する用語と学生にとっての意義

本研究では学生の関わった講座を「アートイベント」と明記した。「イベント」と意味の近いものとして使用される用語に「ワークショップ」がある。アートイベントの中で制作系のイベントを「造形ワークショップ」と呼ぶ場合もある。ワークショップは「参加体験型」「双方向型」のイベントであると言われる<sup>7</sup>。従来型の講座の違いは、先生や講師から一方的に教わるのではなく、ファシリテーターと一緒に時間を過ごす体験の中で、答えや解決策を共に見出していくという点にあると言えるだろう。また学校教育との比較で考えると、ワークショップは参加者の活動や作品への「指導」や「評価」はしない。企画そのものや企画の進行、参加者の満足感に関する反省会はあり得るが、参加者個人への評価を必要としているものではない。ワークショップのファシリテーターは教師とは異なる存在である。ただ、高橋（2012）<sup>8</sup>は、その学校教育との関係性について「造形ワークショップの手法の多くが実は長年の間に小中学校の美術教育や幼稚園・保育所での造形遊びなどから摂取したもの」（p.197）であるとしている。また現代的な意義を、2006年に改正された「教育基本法第6条第2項が述べる『自ら進んで学習に取り組む意欲を高めること』や、学習にあたっての意欲関心・態度などを培うという点は学習の準備や導入からその終わりに至るまでの重要な要素となる。造形の楽しさを児童生徒が直接に享受できるワークショップは、こうした学習意欲の向上に大きな役割を發揮しうる。」（p.199）と記している。また、幼児教育の分野は、数値による

達成目標を置かないワークショップの価値観との親和性が高いと考えられる。

本研究に関わった学生達は主に幼児教育を専門として学ぶ学生である。彼らの大多数は保育園・幼稚園・各施設での実習ののちに、卒業後にそれぞれ就職先の現場で働く。実は、ゼミナール系演習の授業において幼稚園や保育園と連携を取って実践を行うことも出来、園での実践を行えば、将来に直結して非常に速戦的である。そのような中、造形クラスや造形ゼミに属して園から離れた場所で地域の子供達に開かれたイベントに参加することの、学生にとっての意義は何だろうか。

園においては、登園から昼食や午睡の時間などの様々な決められた時間・規則の中で実践活動は進められる。一方でイベントの場合は、集合時間は決まっているが比較的自由度が高い。またイベントでは、基本的に保護者が立ち会う。安全面や排泄などの基本的な活動を保護者に任せた上で、企画者はイベントそのものの活動に集中することができる。学生達は、まずはそういったイベントに関わることで、現場力を段階的に成長させることができるのではないかと考えられる。また、イベントでは、材料用具・活動内容や同時に行うグループの人数なども比較的自由に設定できる。そういった制約の少ない様々なイベントの企画に関わることで視野を広げ、現在園内で行われている造形活動だけでなく、将来幼児教育に関わる専門家として新しい価値観で造形活動やイベント企画に挑戦してもらえないかという期待もある。

ところで、筆者は上記の通り「ワークショップ」の現代的な意義や幼児教育分野との類似性を実感している人間の一人である。しかし本論で下記に報告する7つのイベントでは、特にそれらのイベントが厳密な意味で「ワークショップ」的であるべきだと定義はしていない。その理由は、企画に関わる学生が企画立案当初からこのようなスタイルを知っているとは限らないからである。学生達は、準備段階においては教員・施設職員などとのやりとりを通して、また特に実践時に実際に参加者と関わる時間において、参加者自身が主体的であり企画者が支援者として関わるワークショップ形式の現代的な意義について体感し、その価値観を習得していく。そして幼児教育の専門家としての職業観にその価値観を織り込んでいく。教員はできるだけその過程を大切にし、初めから「ワークショップ的でなければならない」と押し付けた指導はしないように意識している。ただここでは、近年注目が高まっているこういった新しい学びの方法論や価値観が、幼児教育の学生に関わる造形のイベントの活動形態にも影響を及ぼしていることを明記する。なおその他、安全上のことや実施施設との調整以外に指導上注意していることは、企画内容を教員の枠にあてはめないこと、教員の考える完成度を一回のイベントで要求しすぎないことである。学生たちはこれまでに経験から獲得した技術や知識を活用して企画を立案する。彼らの立つ地平線から見える等身大の企画から立ち上げていく過程を重視することが、実際に彼らの確実な力となると考えている。

## 2-1. 実践活動の内容

ここでは、令和元年度～令和2年度に子どもを対象としてゼミ・クラスの学生が企画や運営に関わった子どもアートイベントを取り上げる。

### (1)草木で染めた和紙を使ってうちわをつくろう

2019年8月1日 10時～11時半

定員 20名 幼児から小学6年生 学生 13名

H大学図工室

年度当初からゼミ学生の半数を企画に関わらせて模擬実践を行い検討を重ねてきたが、なかなか企画内容が定まらなかった。結果、まずは教員のアイデアを企画として実施することとなった。教員は、うちわをつくるという明確な



資料1 うちわをつくろう 実践

タイトルの中に、草木染めというやや専門的な用語を入れ、造形に造詣の深い保護者の層にも、経験の少ない層にも響く企画を考案した。夏休みだったために多くの申し込みがあり、定員を上回る26名のこどもとその保護者が参加した。学生は参加者の兄弟である乳児も参加可とし、乳児とその保護者・幼児・小学生の3つのグループに分けて製作の達成目標や用具の対応をグループ別に設定して対応した。初めて参加した学生も多く、専門的な材料用具に対する戸惑いもあったが、子供と行う造形活動の楽しさを知った学生が多かった。

### (2)ミニミニ探検隊 リアルワールドの世界を楽しもう！

2019年10月27日 10時～11時半 定員 30名程度 幼児から小学校低学年 学生

11名 H市美術館2階 講座室

市と大学の連携事業の一環として行った。学生は講座室に多くのダンボールを持ち込んで作成したトンネルを仕切りにし、絵の一部を貼り付けるコラージュ、絵画のパズル、缶バッジを作るなどのコーナーを作り、それぞれ担当学生が子供達を待ち受けるスタイルとした。施設との連携型の中でも展覧会に寄りかからない独自の企画を展開したこと、予約講座型と自由回遊型のハイブリッドで参加者を幅広く獲得したこと、美術館の学芸員ではこれまで対応が難しかった幼児を対象とし、展覧会をモチーフにしながらも単なる鑑賞にとどまらず、作品に「親しむ」活動を展開できたことが関係職員に評価された。



資料2 美術館連携 実践



### (3)紙コップ工作／粘土遊び／子供地球基金に子供の絵を送ろう！

2019年11月9日 10時～15時

H 大学学園祭来場者 60～80名程度 学生 11名 H 大学第1会議室

学生達がこれまでの実践を通して造形に関する独自の研究テーマを見つけ始めた頃で、各グループの企画内容はそれを見すえたものとなった。絵画製作や粘土のコーナーでは、材料用具の活用方法について実践時に試行錯誤する学生の姿も見られたが、学園祭企画として大変盛況であった。この回のチラシ作成は学生が担当した。



資料3 学園祭共同企画 実践

### (4)クリスマスの小物入れをつくろう

2019年12月7日 10時～11時半

定員 15名 3歳～小学3年生まで 学生 11名 H 大学図工室

これまで企画に関わった学生達が中心となって、企画会議を重ねた上で実践を行なった。学生の長所や希望を汲んで担当を決定し、実践研究としてのアンケートも行った。反省会では、子供の姿の事例を挙げたり、材料用具の特性や発達段階に焦点を当てた活発な議論を行えるまでに学生は成長した。



資料4 クリスマスの小物入れをつくろう実践

### (5)絵の具で遊ぼう

2020年3月14日実施予定（新型コロナにより企画中止）

(4)で机上での工作の実践を行なった為、次回は身体を全体を大きく動かす活動がしたいという希望により企画が決定した。上記のような活動を得意とする学生が企画を担当したが、こどもと学生が入り混じり交流する活動を想定していた為にコロナ禍での実施を断念した。



資料5 UFOとロケットをつくろう！実践

### (6)UFOとロケットをつくろう！

2020年10月17日 10時から11時30分 定員 8名 学生 6名 H 市内こども館

年度が変わって新たな2年生のグループで実

践した。通常行っている事前ボランティアができなかったが、定員を絞ることでコロナ禍での実施に漕ぎ着けた。施設との連携事業にも関わらず企画内容を学生に一任頂き、実施場所確保や参加者の申込受付業務などをお願いした上で学生主体の企画となった。年齢を事前に調べ発達による達成目標を綿密に設定していたが、現場では個人差、保護者対応などで想定外のこともあり非常に勉強になったと学生達は話していた。

### (7)大学生と工作を楽しもう

2020年10月17日 13時30分から15時まで  
定員8名 学生8名 H市内こども館

3年生のグループで実践した。近年の学生に見られる特徴の一つで、持ち寄った企画をお互い遠慮して一つに絞れないことが時に起こるが、抽象的なタイトルは、その為である。ペットボトルのキラキラドーム、ストロー・ビーズのプレスレット、紙コップのマラカス、スライムの実践を行なった。1時間半の企画で4つを次々に作り、子供達を飽きさせなかったと施設職員から評価頂いた。



資料6 大学生と工作を楽しもう  
実践

## 2-2. 実践活動における学生の達成度調査

あなたは、自分が関わった子どもアートイベントを通して、自分のどのような能力が向上したと思いますか。現在の正直な気持ちを教えてください。

- (1) イベント全体の流れや時間配分などの見通しについて
- (2) 材料や用具の専門的で実践的な知識の習得と活用について
- (3) 参加する子ども（と保護者）の充実感や満足感を得られる活動を行うこと
- (4) 製作活動の全体説明（導入）について
- (5) 子供達の発達段階などに合わせた必要な支援について
- (6) 学生同士の特性を知り、長所を發揮しつつ、互いに補い合って活動することについて
- (7) 企画を支援してくれる施設やその他の大人とのやりとりや交渉を通じて、自分たちのやりたいこととの共通点を探りながら着地点を見出すことについて
- (8) アートイベント企画運営に関わる中で、自分の成長した部分について自由に教えてください。

資料7 アンケート調査項目

2-1 で記述したような様々なイベントの企画運営に関わった学生、24 人の内 18 人からアンケート調査票を回収した。得られると予想された実践力について検討し、資料 7 の通りに質問項目を設定した。(1)から(7)を段階別選択回答,(8)を自由回答とした。段階別選択回答については、5.十分な能力の向上があった 4.向上があった 3.少し向上した 2.あまり変わらなかった 1.変わらなかった、の 5 段階の選択とした。

### 2-3. 調査結果

#### a) 全体像

全質問の回答平均は、下記の通りである。

|        |       |        |      |
|--------|-------|--------|------|
| 全質問平均値 | 全質問平均 | 3.3571 | N=18 |
|--------|-------|--------|------|

質問項目別平均値

|      | (1)    | (2) | (3)    | (4)    | (5) | (6)    | (7)    |
|------|--------|-----|--------|--------|-----|--------|--------|
| 全体平均 | 3.3333 | 3.5 | 3.6667 | 2.8333 | 3.5 | 3.5556 | 3.1111 |

質問別の結果については、(3)の参加者の充実感への配慮の項目において、全学生平均が一番高い数値を示している。また、(6)の学生間の共同的なコミュニケーションの能力がついで 2 番目の水準であった。前述の大学独自の DiCoRes プログラムの目標 (2 年次) に「子供の興味を引き出す」ことが挙げられていること、同プログラムにおいて協同 (collaboration) が要素の一つとして構成され、その内容が「共通の目的を掲げ、仲間との団結力で物事を成し遂げる力を習得する」とされていることから、子供の興味関心に添うこと、学生間の連携の 2 点については活動当初から学生達が意識している事項であると推察され、なおかつ多くの学生が能力が向上したと実感していることがわかる。

下位点の質問として、(4)と(7)が挙げられる。(4)の全体説明 (導入) については、4 以上をつけた学生が 2 人、2 以下をつけた学生が 7 人と差が大きかった。全体への導入説明を担当した学生とそうでない学生に能力向上の評価が大きく分かれたと思われる。同級生の活動を見て学び勉強になったと考えるところまで至っていないと推察され、それぞれが実際に担当し学ぶことが能力向上の実感には重要であることがわかる。

(7)の実施設やその職員との交渉に関係する事項について、企画の中心にいる学生に任せてしまい、自分で担当しなかった学生もいたと推察されるが、実習や就職先で



同僚や目上の人とやりとりする場面を想定すると、卒業までには全ての学生において向上させていきたい能力である。

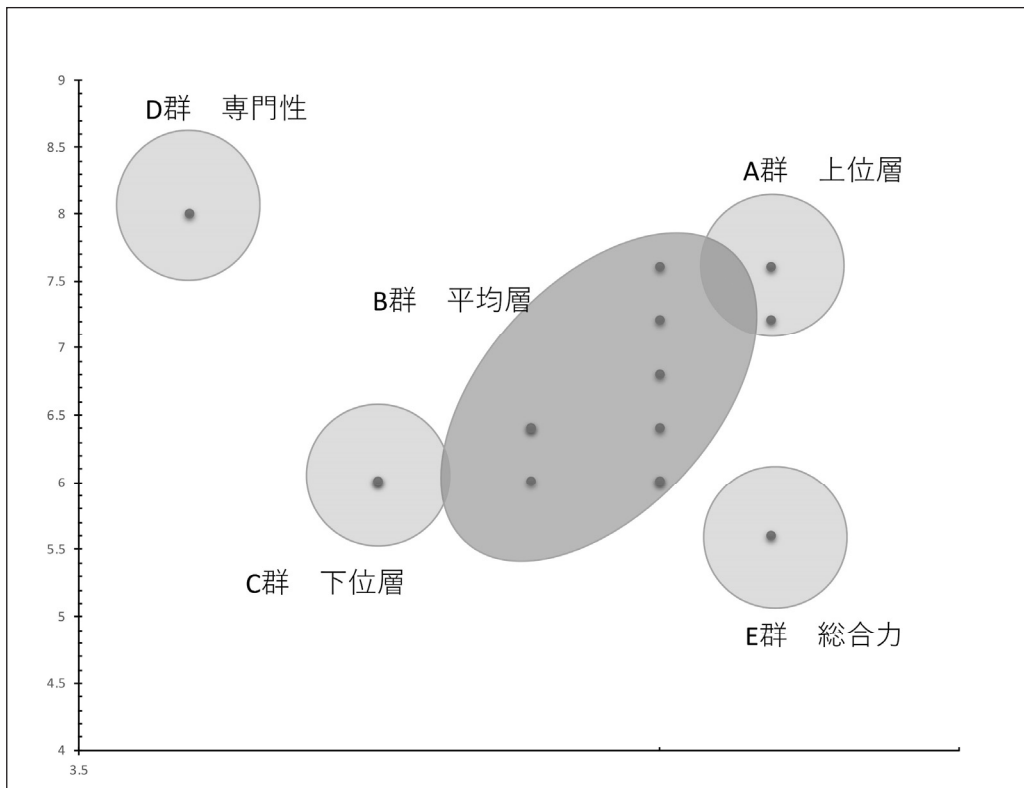
b) 企画への参加回数による比較

今回の調査では、企画への参加回数の1回の学生9名と4回の学生9名に調査を行った。全平均の回答点数は右の通りである。参加回数が多いグループの方がやや実践力の高まりを実感できている。

|           |      |
|-----------|------|
|           | 全平均  |
| (1回参加) 平均 | 3.31 |
| (4回参加) 平均 | 3.39 |

c) 専門性と総合力の比較

項目を2つの視点でグループ分けし、その分布による比較を行った。質問項目(1)～(5)を造形や幼児教育に関する専門性の向上に関わる質問（以下専門性とする）、質問項目(6)(7)を、学生が社会人として成長するための能力向上に関する質問（以下総合力とする）と定義して、その回答点数を個体で比較し、下記の図表を作成した。図中では、同点の個体は省略し記している。図中 A 群, B 群, C 群においては専門性と総合力の高まりにおいてほぼ比例の関係となっており、相関的な関係がみられる。A 群上位層は、4回参加の学生が2名、1回参加の学生が1名であった。活動を通して得た自分の能力向上に関して満足感が高い学生達であると言える。



資料8 調査結果の専門性と総合力の比較

C 群下位層は 1 回参加の学生 2 名であった。1 名は、一つのイベントについて非常に熱心に中心的に関わった学生だったが、自分の実際に行ってうまくいかなかったこと、役割として関わられなかったことに低い点をつけていた。もう 1 名も、元々このイベントに関わる前から比較的能力が高く、サークルなどの別の機会を通して成長が大きく見られる学生であり、このイベント単体での成長は実感できなかつたかもしれない。

D 群においては、学生の能力向上の意識は専門性の方に傾いており、本来学生が身につけていくべきコミュニケーション能力や社会性などの総合的な力は向上をあまり感じられていない。この学生の(7)対外的な大人との交渉に関する項目は、2 であった。しかし学生間のコミュニケーションや協力については 5 をつけており、この学生は(8)の自由記述に、イベント企画の活動を経て、「4 年生になって幼稚園実習で職員会議に参加したが、いろいろな人の意見を参考にしたり、その中でより良い活動にするためにどうしたら良いかを考えるのは面白いと感じるようになった。」と記しており、学生間のコミュニケーションや協力の能力向上を十分に実感した上で、大人の集団で協力して作り上げる活動に関心が高まっている姿が見られた。

反対に E 群においては、総合力の向上を実感しているが、造形や保育の専門的な能力の向上を感じられていない学生である。該当学生の自由記述には、「クリスマスの工作イベントの企画を担当した。発達段階など、他の学生のやり方を見れたし意見を聞けたのですごく参考になった。(中略)けど、その後の実習で造形活動をやった時に、あんまりできなかったのので、実際技術的には向上しているかどうかはわからない。」と、正直に具体的な記述がされていた。グループでは助け合うことで実践出来ていたが、一人で行う実践にはまだ十分な能力を身につけられていなかったことが推察される。

#### d) その他の自由記述から読み取れる実践力向上の成果

一番多く読み取れたのは、保護者理解に関する能力の向上を実感する声であった。18 人中 5 人が保護者理解について具体的に記述した。以下に 3 例を引用する。「企画段階では、子どものみ預かって行った方がやりやすいと思っていた。(中略) イベントの中で親御さんと親子の関係を見ていると、次第に、対子どもだけでなく、対親子も楽しいと思った。親子と一緒に空間で、それぞれの親子の関係性も見て、支援していくのも良いと思った。」「保護者が近くにいると子供が安心感も良い活動につながる場合もあると感じた。」「保護者と話すのは以前はあまり好きじゃなかったけど、保護者の方とずっと話したいという気持ちが現れた。」多くのイベントで保護者同伴であることについて、学生は緊張を伴い難しさを感じる場合もある。しかし自由記述を読むと、実践の経験を通して、子供に成長してほしいという共通の目的を持った存在として保護者を認識し、関わり方を学んで行く過程をみることができる。

また、準備物の不備については、どの学生企画でも容易に起こりうることで、当日の実施直前になって慌てる姿をよく見かけた。学生も「事前に使用する物の準備はしてい

でも当日になって、足りないものが出てきたりしたため、全員で事前に物や手順の確認などを行うようにすべきだと実感し、実生活でも準備に気を付けるようになった。」と記述しているが、不測の事態に直面した時にどのように対応するかも学生たちの大切な課題であると考えられる。事前に教員が指摘するのではなく、現場で足りないとわかった時、代替用品や現場周辺で購入できる店舗の検討など、どのように講座の目的を達成しつつその材料用具の不足を適切に解決するかを学ばせる機会としている。

その他、自由記述から読み取れた成果については、子供と関わる喜び・企画力・外部との交渉やコミュニケーションの能力向上や、積極性・芸術との関わりなどについての記述があった。以下に代表的な記述を挙げる。

<子供と関わる喜び>「子供達が輝いて楽しそうにしていた様子を見ることができました。自分の中では、たくさんの子供達や保護者など来場者の人と話せたことも成長につながったと実感する大きな理由です。」「小学生も結構来てくれて、幼保専攻では関われない年齢の子達と関われたことが貴重だった。」「子どもたちがたくさん来てくれて、楽しみにしてくれた子がいた。紙粘土が足りなくなったりするぐらい盛況だったことも良かった。」

<企画力>「一年間であったが、数多くのアートイベントに関わった中で（中略）時間配分や運営面を考えて企画する力が身についた。」「自分の中だけで解決せずに、全体の流れを作ることに学ぶことができた」「色々な施設を使わせてもらう中で、調整や計画性などが重要だと知った。」

<外部との交渉やコミュニケーションの能力>「やりとりしていく中で、美術館と学生の間立ってやりとりすることがあったのだが、意見を美術館の人とゼミで伝え合えることが成長できた。」「大人の前立って話をするが多かったため、そういう面では、今後就職先で保護者と子どもについて話すときのために、大人としての立ち振る舞いを学ぶことができた。」

<積極性>「保育士になりたいけど、人前が出るのが苦手だった。以前は、他の学生がやってくれるのでいい、前に出たくないと思っていた。（中略）イベントをやって、学生同士協力して、分担するうちに、だんだんできるようになって、前で話すことにも慣れ、楽しく感じるようになった。」

<芸術との関わり>「美術館でのイベントなどは一生できない活動であると思ったので、そこについては良かったと思う。」「全く知らないアートの世界にどっぷりつかったことが、一番良い意味で刺激があったと思う。」「そもそもの正直、考え方が変わった。造形ゼミにしたのは、図画工作が苦手だったから。小学校以来苦手意識があったが、克服したかった。（中略）すごい得意になったわけじゃなくても、苦手意識がなくなったと思う。」

上記のように、未知だったアートの世界を味わったという充実感、図画工作に関する苦手意識の克服について学生達が実感してくれた事は、芸術学の学生ではなく、幼児教育を専門に学ぶ学生たちとアートに関われることの喜びでもある。

### 3. 今後に向けて

今回の調査で、学生達がどのように自分の実践力の向上について捉えているのかを

知ることができた。多くの学生が一定の実践力の向上を実感し、成長があったと回答したことを評価したい。一方でいくつかの項目については、実践力向上の実感にやや偏りが見られたことも事実であり、今後の指導上の課題としたい。

イベントでの実践は、学生および企画に関わる人材・材料・活動費・会場・季節や他のイベントとの兼ね合いなど、様々な要件に左右される。それだけに、前々から計画・準備できるものばかりではない。年度当初は未確定の中で学生指導を展開していく点において、教員側にも流動的な動向に対しての耐性が求められる。実践はそれを受け入れてくれる施設側の事情なども鑑みて設定する必要があるが、学生指導の観点からの計画的で理想的な実践の「構想」だけではできないが、集まった学生たちの集団としてのスキルを読みつつ、一期一会の出会いや企画の盛り上がりなどの機運を掴み、いかに流れに乗りつつその時に集った学生に必要な能力を伸ばしていくかが鍵になってくる。昨年度・今年度ともに各施設との縁と意欲のある学生に恵まれ、様々な企画に関わることができた。保育・教育に関わる学生の実践力向上の為に、今後も子どもアートイベントの活用を続けていきたい。

---

## 引用・参考文献

- 1 緩利誠・名倉一美・田嶋善郎(2012), 教育実践力向上を目的とする DiCoRes プログラムの開発, 浜松学院大学学習支援センター紀要, (3), 23-39 頁に詳しい経緯がある
- 2 名倉一美・緩利誠(2014), 教育者・保育者を目指す大学生による子ども対象のイベント実践型活動の成果と課題－DiCoRes ミュージアムを事例として－, 浜松学院大学地域共創センター紀要, (2), 11-30 頁
- 3 池谷美衣子(2015), 実践活動のカリキュラム化とその「学習成果」－地域開放型イベントの企画実践を対象に－, 浜松学院大学地域共創センター紀要, (3), 19-30 頁
- 4 大泉義一(2020), 造形ワークショップの実践を通じた子育て支援における「重層的な関係」の構築・Ⅱ－そごう美術館『レオナルド・ダ・ヴィンチに挑戦!』の実践から－, 美術教育学研究, (52), 73-80 頁
- 5 香月欣浩(2016), 子ども向け造形ワークショップ実施における学生の育ち, 四條畷学園短期大学紀要, (49), 33-39 頁
- 6 本研究以前に筆者が関わった子どもアートイベントについては, 笥有子・島埜内恵(2018), 浜松地域のアート関連施設との連携事業による子どもワークショップについて, 浜松学院大学地域共創センター紀要, (6), 74-84 頁を参照
- 7 中野民夫(2001), ワークショップ－新しい学びと創造の場－, 岩波新書
- 8 高橋陽一(2012), 造形ワークショップを支えるファシリテーターの力, 武蔵野美術大学出版局